仮想的有能感における攻撃行動に承認欲求が与える影響

○小野夏生¹・岩永誠¹

(¹ 広島大学大学院総合科学研究科)

キーワード：仮想的有能感・承認欲求・生理反応

The effects of the esteem needs to the attacking behavior in Assumed-Competence

Natsuki ONO¹ and Makoto IWANAGA¹

(¹ Graduate School of Integrated Arts and Sciences)

Key Words: Assumed-Competence, esteem needs, Physiological responses

目 的

仮想的有能感とは、自己のポジティブ経験に関係なく、他者の能力を軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚である(速水他, 2004)。これは他者軽視と自尊心の2軸から成り、他者軽視傾向高自尊心高者が仮想的有能感を持つ。仮想的有能感をもつ者は被拒絶感が強く、受容されないことへの不安から他者を信頼できず、被害者意識につながる可能性が指摘されている(高木, 2012)。これより、低い自尊心から被害者意識を抱き、そこから生じた怒りを他者軽視により強め、攻撃表出が起こるという過程が考えられる。しかし、被害者意識が生じた場合には承認欲求の高さが怒りを喚起する可能性がある。承認欲求が高いにもかかわらず満足な扱いを受けられないと怒りが生じ、他者軽視をすることで怒りを表出することが正当化されると考えられる。承認欲求には賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の2つがあるが(児島他, 2003)、怒りの生起には賞賛獲得欲求が関連していると考えられる。以下の仮説を立て、実験を行った。賞賛獲得欲求高群は低群より、1. 怒り得点が高い。2. 攻撃反応が高い。3. 生理反応が高く賦活する。

方 法

〈実験参加者〉49名(女性23名, $M=19.5 \pm 1.35$ 歳)
 〈手続き〉入室, 同意書への記入→プレベース測定→気分評定→課題①(計算)の実施→課題②(作文)の実施→文章評価→刺激→気分評定→課題③(攻撃性測定)の実施→ポストベース。実験の所要時間は90分程度であった。実験参加依頼時に、別の参加者(実際にはいない)と2人1組で実験を行うと教示した。課題②終了後の生理反応を測定した。その後、事前に用意した文章をもう一人の参加者が作成したものとして与え、評価させた。そのあと事前に用意した刺激を用いて否定的評価を与え、その時の感情を評定させた。
 〈課題〉①計算課題(100マス計算, 5×5)、②作文課題(200字程度)、③架空の相手に解答させるマスの数を指定させた
 〈刺激〉参加者の文章に対して否定的評価を与える評価書
 〈生理指標〉心拍数・呼吸数・GSR・血流量
 〈主観指標〉仮想的有能感尺度(速水, 2006)、ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版(桜井, 2000)、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度(小島他, 2003)、STAXI日本語版(鈴木他, 1994)、短縮版多面的感情状態尺度(寺崎他, 1992)
 〈行動指標〉課題③でマスを多く指定するほど攻撃性が高い
 〈分析〉他者軽視×自尊心および賞賛獲得欲求×拒否回避欲求の2要因分散分析を行った。

結 果

主観指標の分析の結果、怒り得点において、自尊心の主効果が認められ($F(1, 47)=7.33, p<.01$)、低群は高群より怒りを感じたことが示された。また、他者軽視の主効果も有意傾向で($F(1, 47)=3.95, p<.10$)、高群は低群より怒り得点を高く評価した。しかし、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求では主効果が

交互作用は認められず、仮説1は不支持となった。

攻撃反応の分析の結果、他者軽視と自尊感情の影響は認められなかった。しかし、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の交互作用が認められ($F(1, 45)=6.27, p<.05$)、拒否回避欲求高群において、賞賛獲得欲求高群は低群より高い攻撃反応を示した。よって仮説2は一部支持となった。

刺激提示後の生理反応の分析の結果、心拍数において自尊心の主効果が認められ($F(1, 47)=9.01, p<.01$)、低群は高群より心拍数が増加した。呼吸数において他者軽視の主効果が認められ($F(1, 47)=4.26, p<.05$)、高群は低群より呼吸数が増加した。血流量において拒否回避欲求の主効果が認められ($F(1, 47)=4.28, p<.05$)、低群は高群より血流量が増加した。また、他者軽視の主効果が有意傾向であり($F(1, 47)=3.34, p<.10$)、高群は低群より血流量が増加した。GSRにおいては主効果・交互作用は確認されなかった。生理反応の賦活には自尊心と他者軽視が影響し、承認欲求の拒否回避欲求が血流量に影響するのみであった。よって仮説3は不支持となった。

表1 賞賛獲得欲求と拒否回避欲求による群間比較

	怒り感情	攻撃反応	心拍数	呼吸数	血流量	GSR
1	1.18	45.25	-0.35	0.67	-2.47	-5.67
2	1.19	34.29	-1.05	1.40	0.31	5.79
3	1.19	32.07	0.05	0.02	-13.12	-10.42
4	1.50	46.75	3.75	0.97	3.11	-1.11
交互作用	0.466	0.016 *	0.245	0.856	0.165	0.894

* $p<.05$

1: 賞賛獲得欲求高拒否回避欲求高群、2: 賞賛獲得欲求高拒否回避欲求低群、3: 賞賛獲得欲求低拒否回避欲求高群、4: 賞賛獲得欲求低拒否回避欲求低群

考 察

怒り感情において、他者軽視と自尊心の影響は認められたが、承認欲求の影響は確認できなかった。生理反応は高い他者軽視と低い自尊心により促進されたが、承認欲求では拒否回避欲求が血流量に影響するのみであった。このことから、怒りの生起には承認欲求はほとんど影響しない可能性が示された。攻撃反応では、拒否回避欲求高群において賞賛獲得欲求高群は低群より高い攻撃反応を示し、承認欲求のみが影響した。本実験の行動指標は、一般的に攻撃と捉えられるものではなかった。賞賛獲得欲求高拒否回避欲求高者が高い攻撃反応を示したのは、否定的評価により生じた不満を、他者から批判されない行動で表出したと考えられる。

引用文献

速水敏彦(2006)。他者を見下す若者たち。講談社。
 速水敏彦・木野和代・高木邦子(2004)。仮想的有能感の構成概念妥当性の検討。名古屋大学大学院教育発達科学研究紀要、心理発達科、51, 1-8。
 小島弥生・太田恵子・菅原健介(2003)。賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み。性格心理学研究、11, 86-98。
 太田肇(2007)。承認欲求:「認められたい」をどう活かすか? 東洋経済新報社。
 桜井茂男(2000)。ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討。筑波大学発達臨床心理学研究、12, 65-71。
 鈴木平・春木豊(1994)。怒りと循環器系疾患の関連性の検討。健康心理学研究、7, 1-13。
 高木邦子(2012)。仮想的有能感をもつ人の個人的特徴。他者認知。速水敏彦(編著)。仮想的有能感の心理学。北大路書房。pp. 62-71。
 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人(1992)。多面的感情尺度の作成。心理学研究、62, 350-356。